

# 基礎的学力の向上をめざしたエビデンスに基づく 学習支援

－ 正確性・流暢性指導に焦点を当てて －

学籍番号	219226
氏名	安井 理恵
主指導教員	庭山 和貴
副指導教員	岡田 和子

## 1. 実践課題研究の背景

文部科学省（2022）は、通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果において、学習面または行動面に著しい困難さがある児童の割合が8.8%と示しており、課題が大きいといえる。なかでも、学年別の推移を見ると、小学校低学年期において、困難さを示す児童が多いと示されている。小学校低学年期から学力向上に取り組むことで負の連鎖を断ち切る一助になるのではないかと考える。

よって本実践研究では、効果が実証されている実践を学校規模で行っていき、成果データを教職員で共通理解し、PDCAサイクルを回しながら取り組んでいく。

## 2. 実習校について

実習校は、学力に大きな課題がある。授業中においても、文章が多く書かれた問題や難しい問題が出ると諦めてしまう児童が多く、学習意欲も低い。

そこで実践課題研究では、応用行動分析学に基づいて児童の望ましい行動を増やし、基本的・基礎的学力の定着・向上を図ることをめざす。また教員間で本校の課題を共有し、子どもの実態を踏まえた指導法を検討し実施していくことを目的とする。

## 3. 実践課題研究Ⅰ：基本学校実習の取り組み

基本学校実習Ⅰでは、第2学年の児童を対象とし、日々子どもたちとの関わりを通して、児童の「読みのスキル」と「たし算・ひき算の習熟段階」などの実態の把握に努めた。基本学校実習Ⅱでは、多層指導モデルMIM-PMや算数CBM（野田，2020）の分析を行い児童のニーズを明確化した。明らかになった「読みや計算の流暢性」についての援助ニーズに基づいた指導や支援も積極的に行った。その結果、児童の計算のスキルが少しずつ

ではあるが向上してきた。さらに学級全体としてよい行動を広げようとする姿が多く見られ、前向きに学習に取り組む児童が増えた。

#### 4. 実践課題研究Ⅱ：発展課題実習Ⅰの取り組み

対象とする学級が変わったため第2学年を対象とし、児童の実態把握やニーズの把握を行った。「読みの流暢性」や「計算の流暢性」などの課題を多層指導モデルMIM-PMや算数CBM(野田, 2020)の分析結果で可視化した。実習校の教職員とMIM-PMや算数CBM(野田, 2020)の分析結果を共有し、計算や読みの流暢性を高める取り組みを連携して行い効果検証も行った。また、授業参加率についても、学級全体の授業参加率のスクリーニングデータを、45分間を1セッションとして計3セッション記録した。これらの成果データをもとに、学級・学年での第1層支援の改善と継続を判断し、関わる教職員全体でデータに基づく意思決定を行った。

#### 5. 実践課題研究Ⅱ：発展課題実習Ⅱの取り組み

対象とする学級は、発展課題実習Ⅰと同様第2学年とし、算数CBM(野田, 2020)やMIM-PMの分析に基づいて、児童の実態やニーズを引き続き把握した。実習校の教職員とMIM-PMや算数CBM(野田, 2022)の分析結果を共有し、計算や読みの流暢性を高める取り組みを連携して行い効果検証も行った。さらに「学校規模ポジティブ行動支援」の取り組みを進め、児童に対してABC分析に基づき学校生活におけるアセスメントを行うとともに、児童一人ひとりのニーズに応じながら主に授業参加行動を促す支援を中心に支援を行っていった。授業参加率については、学級全体の授業参加率のスクリーニングデータを、45分間を1セッションとして計3セッション記録し、これらの成果データをもとに、指導・支援の効果検証を行った。

#### 6. 総合考察

本実践研究では、2年間、実習校の様々なニーズを抱える児童がいる学級で、計算や読みのスキルについてアセスメントをし、それに基づいた支援や指導を行った。基礎学力の向上をめざし、算数CBM(野田, 2020)や多層指導モデルMIM-PMの分析を行いながら、それによって明らかとなった課題について指導・支援の改善を行いながら取り組みを進めてきた。学習支援の実践を継続していくことで、計算の正確性・流暢性や読みの正確性・流暢性を高め、基礎学力の向上をさせることができると考える。